

イデオロギーの衝突と融合

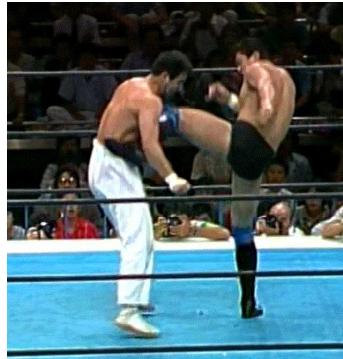
- 新日本プロレス VS U. W. F. -

1985 年秋、前回観戦した旧東京体育館で猪木・藤波戦が行われる直前より、水面下で新日本プロレスと独自の興行を継続できなくなったり UWF の業務提携交渉が始まった。UWF は新日本プロレスのみならず全日本プロレスとも交渉をしていた。しかし全日本には長州率いるジャパン勢、さらにはラッシャー木村を筆頭とする旧国際プロレス勢が参戦しており、ジャイアント馬場は「前田日明・高田伸彦のみの受け容れ」を提示したという。そこで前田は UWF 全選手参戦を受容した新日本と業務提携を結んだ。1985 年 12 月 6 日の両国、猪木・坂口 VS 藤波・木村健吾のタッグリーグ戦前に業務提携締結が発表された。若干強張った表情の前田日明がマイクを握り「この 1 年半、UWF の闘いが何であったかを確認するためにやってきました。試合を受けてください」と挨拶。新日本 4 選手と UWF 勢が握手を交わした。戦力不足に悩んでいた新日本プロレス陣営が充実するかと思いきや、あくまでも「業務提携」であって常に団体対抗戦の緊迫感が伴うことになった。皮肉にもこの殺伐とした試合の数々が揺らいでいた新日本プロレスの巻き返しに貢献することになる。



① 1986 年 8 月 5 日 東京・両国国技館
(I W G P ジュニア・ヘビー級選手権)
高田伸彦 VS 越中詩郎

この試合に先立つ 5 月 19 日の後楽園ホール大会で両者の対戦が実現した。王者・越中に高田が挑み激戦の末、高田がベルトを奪取した。ホールの客大絶賛の好勝負だったそうだが、残念ながらノーカットで映像記録は存在していない。この対戦はそのリマッチである。越中としては何としてもタイトルを奪回したいところ。このタイトル・マッチに至るまで



地方では数え切れない対戦をしている中で『高田が攻めて越中が耐える』試合展開が構築されていた。

高田の鋭い蹴りを胸を突き出して受け、タイミングをみて反撃していくスタイルで越中の評価は急上昇していった。だが高田も容赦



の無い蹴撃をみせ、越中をマットに這いつくばらせる。スタンディングでは各種のキック、ダウンしたら関節技で高田は越中を苦しめていく。越中も随所で反撃をみせるが、高田はすぐに関節技で切り返し、越中のスタミナを奪いながらダメージを蓄積させていく。越中が攻勢に出てもダメージとファイト・スタイルとリズムの違いによる焦りに付け込まれ、流れが寸断されてしまう。カール・ゴッチ式のブリッジで高田がドラゴン・スープレックスを見せるが、ス



ピードが足りなくブリッジが崩れてしまう。高田は踏ん張ってホールドを立て直すも越中がキック・アウト。今度は高田がチキン・ウイング・フェース・ロックに移行、越中がロープに逃れようとするが高田が足をかけて動きを封じ、そこでレフリー柴田勝久（柴田勝頼の父）がレフリー・ストップを要請、越中が抗議するも自力での脱出は極めて困難な状態であった。

② 1986年8月5日 東京・両国国技館

(IWGPタッグ選手権)

藤波辰巳／木村健吾 VS 木戸修／前田日明

前年末、念願の猪木フォールを達成した藤波・木村組は初代 IWGP タッグ王者となつた (WWF との業務提携解消によりインターナショナルタッグ王座を返上したため)。当初、前田は藤原喜明と組んで挑戦の予定だったが、藤原の体調不良（骨盤のズレ）により木戸に変更となった。下馬評は「木戸が負ける」だった。試合は前田が両国大会であることを意に介さず、道場でのスパーリングのような展開で進めていく。越中同様、藤波も UWF の打撃を真っ向から受け止め、切り返しながら観客の期待に応えようとする。木戸はロープに振られれば返ってくる従来プロレスの闘い方が中心だが、関節技が緻密・丁寧なファイターで、藤波・木村とも手を合わせていける。だが前田が出てきてキックを繰り出すと雰囲気は一変し殺伐したものとなる。藤波も蹴りを食らいながらも蹴



り足をとらえてサソリ固めに入ろうとする。すると前田はステップ・オーバーされる前に自分の身体を回転させて藤波を倒し、そのまま片



逆エビ固めに移行する。結果として藤波はエスケープするも、足首を脇に抱えて絞りあげるため、通常の逆エビ固めの苦しさに加えて両足首を固められた痛みが伴う。こうした判り辛いテクニックを盛り込んでいるのがUWFスタイルである。

衝撃は突然訪れる。タッチしてリング内に入った木村が藤波の抑えている前田の胸にキックを入れる (キック2発・チョップ1発)。





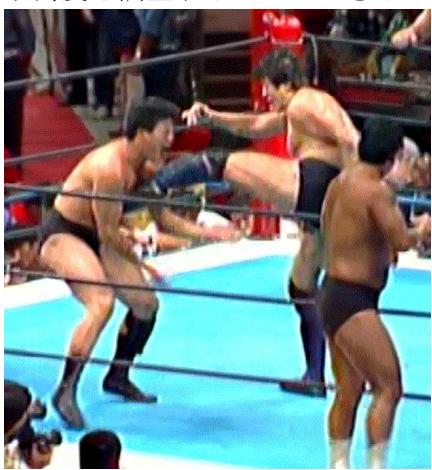
レガースを付けずUWF選手に蹴りを入れるのは挑発に他ならない。チョップ後に手詰まりで棒立ちとなつた木村を前田のハイ・キックが襲う。木村の崩れ落ち方が事態のシリアスさを物語っている。



代わって入ってきた藤波も前田に蹴りを見舞うが、前田は藤波の蹴り足をとらえて首にも手を回してそのままスープレックスへ。これが前田のオリジナル・スープレックス「キャ



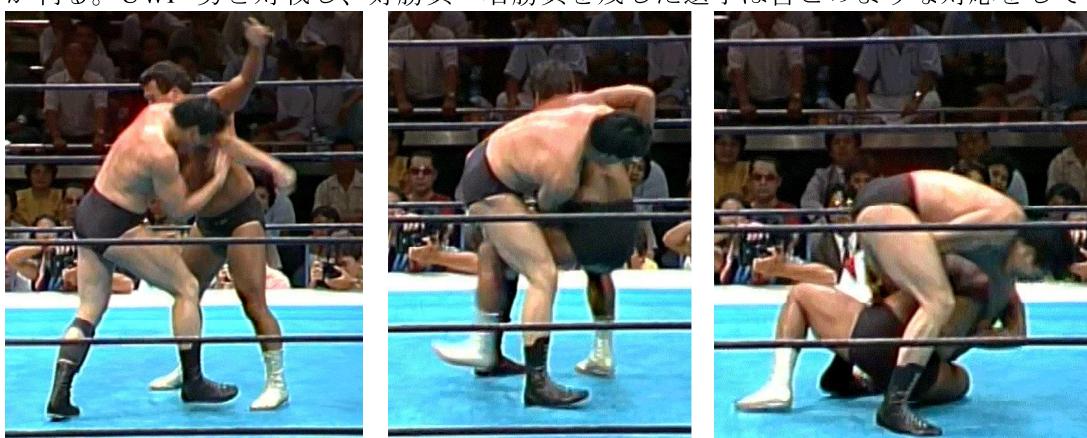
プチュード」(単語の正しい発音はキャプチャードだが、イメージ重視で変えた)である。このキャプチュードは前田の右手が藤波の脇から回されていたため形が崩れてしまったが、相手の力量や試合状況によっては頭を落とす角度を調整することができるという。



藤波に代わってリンク・インした木戸が自陣営に引っ張り前田を出す。前田は木戸に(気を遣って)ミドル・キックを連射、前田の蹴りがトラウマになっている木戸は尻餅をつくようにダウン。木戸はキックを受ける際、目を閉じているため胸板から顔面までがノーガードになつてしまふ。越中や藤波はキックを受けながらも、相手の蹴り足の導線を目を見開いて追っている。何発かを食らっても、最終的には蹴り足をキャッチして反撃に移っている。この後に交代した藤波がロープ・ワーク



を利して突進してきたところ前田がフライング・ニールキックで迎撃するが、藤波は前田の蹴り足の導線を予測して腕でガードしている。ダメージはあるものの最小限にしているのが判る。UWF 勢と対戦し、好勝負・名勝負を残した選手は皆このような対応をしてい



る。試合は唐突に終焉を迎える。木村が普段見せない動き（ツームストン・パイル・ドライバーを狙ったか？）に入ったところ、木戸が巧妙に丸め込み、カウント 3 を奪つた。名付けて「キド・クラッチ」だ。前田が珍しく 3 カウントが入ったことをジェスチャーで表現して喜んでいる。ベルトを獲得した前田はマイクを握んで『UWF の前に常勝将軍はいない』と発言、高田に続いて新日本マットでタイトル・ホルダーとなり、リング上の存在感を以前にも増して大きくしていった。

③ 1986 年 9 月 18 日 福岡・福岡スポーツセンター

(I WGP ジュニア・ヘビー級選手権)

高田伸彦 VS 越中詩郎

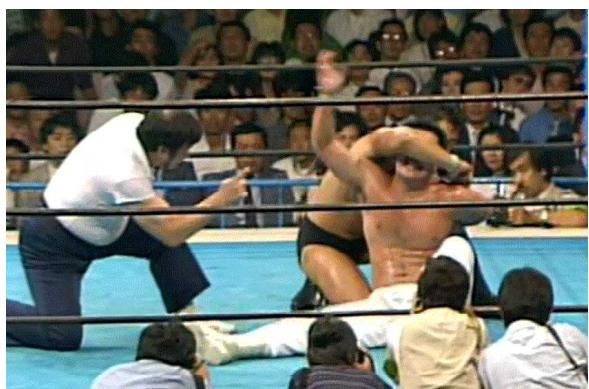
両者の持ち味が存分に発揮されることから藤波・長州戦にちなんで「新・名勝負数え歌」と言われた高田・越中戦。対戦を重ねる度に攻防も進化していく。序盤、高田が威嚇のミドル・キックの後、不意にハイ・キックを打つ。スピードが速い蹴りを、越中は辛うじて頭を沈めてかわす。頭頂部をかすめながらも、越中にダメージは無い。これまでの対戦から相手の動きを瞬時に判断、即時の防御をとるこの行動は、レスラーの鍛錬の賜物である。

通常のスタンディング状態で高田は唐突のハイ・キックを計 3 度出しているが、最初を除いて越中は完全に凌いでいる。試合展開は高田が打撃から組み付いての関節技、越中がそれを耐えて反撃するという地味なものだが、突然終了となるかも知れない緊迫感は続く。次第に感情を前面に出し、ひとつひとつの絞め技・関節技



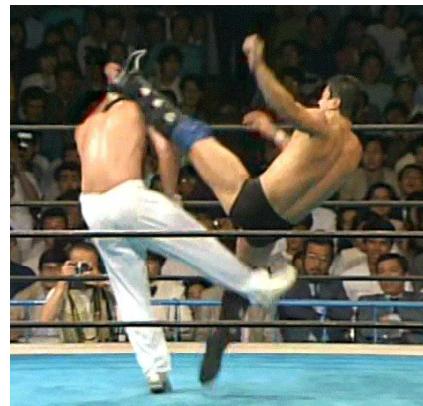
に渾身の力を込めていたのが判る。越中が高田の動きをよく見て、その攻撃をかわしながら

ら徐々に試合の主導権を掴んでいくかに見えたが、高田も直ちに攻勢に出る。捻りを加えたバック・ドロップからジャブのミドル・キックからの顔面ハイ・キック、立ち上がりざまの越中に再度顔面ハイ・キックで越中を崩していく。越中も厳しい高田の攻撃に呼応する



かのようにスパートをかけ、一進一退の攻防が展開される。高田もキック&サブミッションだけでなく、3カウントをとる丸め込み技も見せるなど元々の柔軟なファイターぶりを發揮する。高田はロープ際でのドラゴン・スープレックスからのチキンウィング・フェース・ロックといふ

8月5日



の勝利パターンで越中を追い込むが、これを脱出した越中はまたしても高田の攻撃を凌いで攻めに出る。よく高田の動きを見ながら反撃しており、ミドル・キックを胸板で受けながら、いつもの蹴り足キャッチではなく軸足払いでの高田をダウンさせる。キックを武器にしている選手にこの対応をすれば、警戒してキックをする攻撃が減ってしまう。高田が珍しく後頭部へのローリング・ソバットをヒットさせるが、気合いで立ち上がった越中は高田のバックにまわり込んでの電光石火ジャパンニーズ・レッグロール・クラッチ・ホールド。ロープから手を離した高田の「しまったっ」という表情が、この試合の結末そのものを表している。

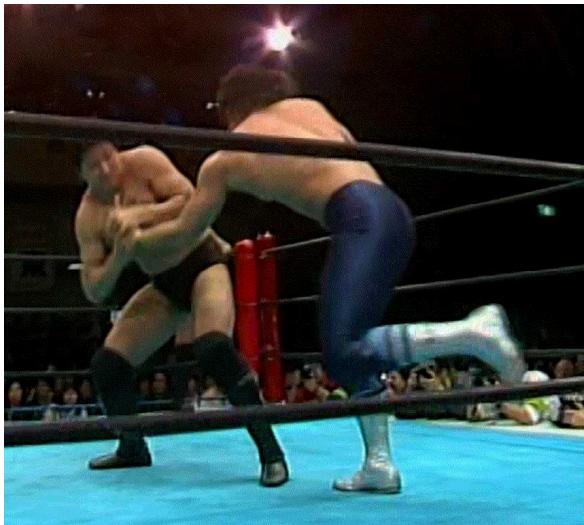


④ 1987年3月20日 東京・後楽園ホール

(IWGPタッグ王座決定戦)

越中詩郎／武藤敬司 VS 前田日明／高田伸彦

1987年2月、藤波・木村組の解散によりタッグ王座が返上され、王座決定リーグ戦が行われた。新日本プロレス側からは喧嘩をすること多かった越中詩郎と武藤敬司が組み、UWF陣営からは前田・高田のキック&サブミッション主体のチームが決定戦に勝ち上がった。越中は高田とは勿論、前田とも手が合うのはこの時点では周知の事実であり、会社



など、若い頃の武藤は心臓に毛が生えていると言われるほど図太いところがあった。越中はキック攻撃に免疫があったものの、前田のヘビー級キックには苦しめられてしまう。ロープ・ワークの展開になれば越中も前田とある意味対等に渡り合えるが、渾身のヒップ・アタックをキャッチされ、そのままジャーマン・スープレックスで投げ飛ばされるとい

から猛ブッシュされ（観客から反感を持たれてもいた）ている若手の武藤がどこまで食い下がれるのか？が観客の関心であった。前田は武藤の手首をとって左右に振り回す。対する武藤も柔道で培った受け身と道場のスパーリングで体得した技術で対処する。前田相手にアキレス腱固めを見せる



う予想外の返しを食らってしまう。後楽園ホールの客は武藤が

高田にいなされると拍手を以てUWF勢を後押しする。高田は得意のミドル連射からのローリング・ソバットの連続攻撃を武藤相手に繰り出しが、何と武藤はソバットをすんでのところでかわす。その瞬発力は驚異的だ。つかさずその場跳びのドロップ・キックから角度は無いもののバック・ドロップで高田を攻め立てる。一若手に攻められた高田は涼しげな顔をしながら場外へのブレーン・バスターをエプロンで着地した武藤にローリング・ソバット2発を食らわせて溜飲を下げる。代わった前田の攻撃も手厳しい。片膝をついた武藤にミドル・キック、そのうち1発が顔面を直撃する。さらに叩き付けることを最優先させたスープレックス気味のブレーン・バスター、次いでパワー・スラム式の





キャプチュード、そしてチキンウィング・フェースロックで締め上げ、ショートレンジのフライング・ニールキックで会社に推されている若手にキツめの炎を据えている。キックによって武藤の頭部が受けている衝撃が如何ほど大きいものだったのかが判る。

前田・高田も新日本マットに上がって久しく、滅多矢鱈ではないがロープやコーナーに振ったり、カット・プレーをタイミング良く出したり、サソリ固めなどのプロレス技

も見せるようになり、対戦相手によってプロレスの幅を広げているようだ。前田が越中に見せた珍しい技「かんぬきスープレックス」を見てみよう。相撲や格闘技などで「かんぬ





き」と呼ばれる両腕を正面から締め上げる技がある。前田はこのかんぬきの体勢からそのままフロント・スープレックスの要領で後方に反り投げる。恐ろしいのは越中がマットに叩き付けられても前田のかんぬきは外れていないということ。受け身をとらせないだけでなく、関節技を決めたまま投げているのだ。受け身の巧い越中でも表情が曇ってダメージは残る。武藤が高田相手にスペース・ローリング・エルボーを見せるがかわされてソバット、代わった前田のニー・リフト、ミドル・キックを食らう。武藤も当たりは浅いが下から突き上げるソバットで意地を見せ付ける。越中が高田のサソリ固め、前田の顔面蹴撃につかり、



高速フルネルソン・スープレックスでマットに叩き付けられる。危険を察知した武藤がホールドされる直前からカットの動きに

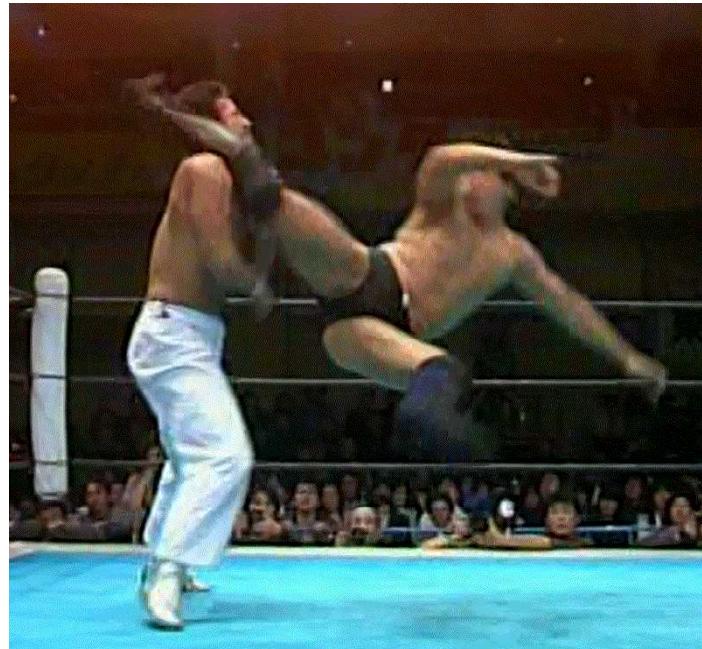


入り、事なきを得た。越中はロープ・ワークを利用して反撃しようとしたところ、カウンターのフライング・ニールキックが首をもぎ取らんばかりに炸裂する。前田があっさりと高



田にタッチして引き下がると、越中も武藤と交代する。武藤は高田にドロップ・キックを連発し、バック・ブリーカーでマットに寝かせ、コーナー最上段からのムーン・サルト・プレスを見舞う。高さ・美しさ、そして威力は申し分ないプレスであったが前田がカットする。越中・武藤組はさらに高田をハイジャック・パイル・ドライバーで追い込む。カットで逃れた高田が前田にタッチすると観客の嘆息が大きくなる。越中を腰

投げで放ると、間合いをとつて再度ショート・レンジのフライング・ニールキックで首を刈る。誰もが万事休すと思った瞬間、越中は体を入れ替えて逆さ押さえ込み。何とかカウント2で返した前田は冷静に高田と交代。高田はカットに入る武藤をリング下に放り、ダウンしている越中にサソリ固めを繰り出す。越中は下から張り手で高田の体勢を崩しそのままもみ合うような丸め込み。高田はもがいていた



ものの、ガッチャリと固められていたので返すことができなかった。観客の多くが大番狂わ



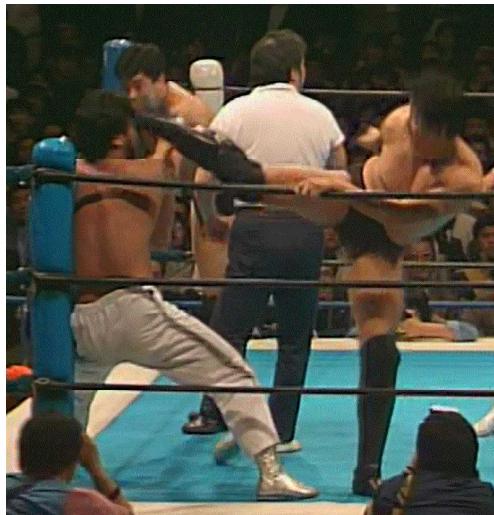
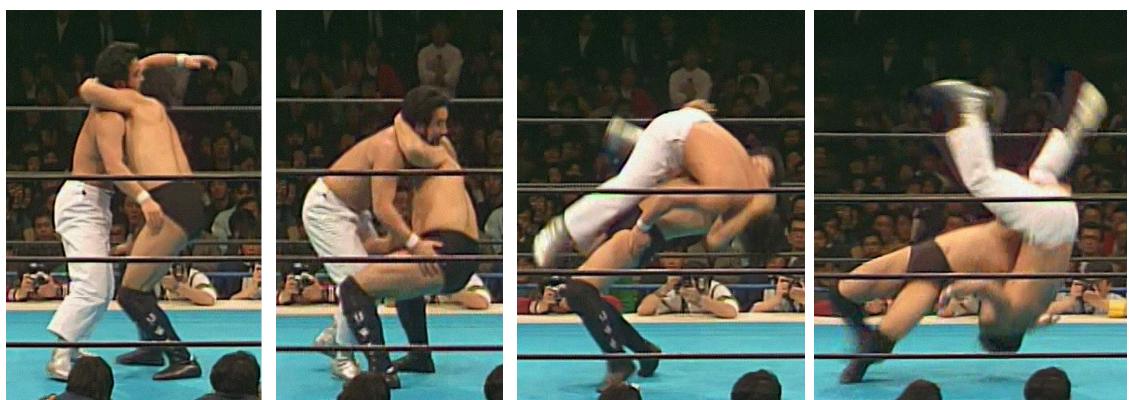
せにも似た越中・武藤組の逆転勝利に狂喜乱舞する。後楽園ホールが爆発的な盛り上がった。負けた前田・高田も潔く握手を求め、勝者を讃える。武藤の胸を一発叩いて一言を与えた前田の表情が印象的であった。

⑤ 1987年3月26日 大阪・大阪城ホール

(IWGPタッグ選手権)

越中詩郎／武藤敬司 VS 前田日明／高田伸彦

6 日前の後楽園ホールでも顕著になったキャリアが一番短いにもかかわらず物怖じしないで醸し出される武藤の「大物感」。リターン・マッチの今回も健在である。越中も後楽園ホールではタジタジになった前田のキックを巧くさばいていく。前田もウェート差はあるが気迫で一歩も引かない越中を認めているが故に攻撃が厳しくなる。キャプチュードの危険度合いが、逆説的に越中がUWF勢に一目置かれていることを証明している。



さらにコーナーに押し込んだ越中を高田が、次いで前田が蹴撃する。前田の3発目がハイ・キックで越中の顔面にヒット、観客の響めきとともに越中は腰碎けに崩れ落ちていく。実況・古館伊知郎の「キックの千手観音」という日本語的に矛盾しているが妙に説得力がある（他に「キックの雑木林」も斬新な表現である）。後楽園ホールではかんぬきスープレックスを見ることができたが、大阪城ホールではフロント・スープレックスが炸裂する。前田が越中を正面から抱え込み、そのまま低めの軌道で反り投げている。投げられている越中が危険を感じ両手をマットに突き出し咄嗟に受





け身をとろうとしたものの、脳天がマットに突き刺さる方が早かった。越中の頭（首）が支点となり身体がグニヤつくなっているのが極めて危険である。その後のパイル・ドライバーも越中へのダメージを狙ったものだ。代わった高田も越中の頭部へ攻撃を集中させ



る。高田が見せたのはスロイダースープレックス（選手によってはベリー・トウ・ベリーとも。片腕をグリップして投げる場合もある）。こうして各種スープレックスで越中はダメージを重ねていく。

体力を温存していた武藤が一気にラッシュをかけ、高さ充分のムーンサルト、ハイジャック・パイル・ドライバーで追い込むが、2度も負けられない高田はカウント2で返す。ここから前田・



高田は積極的にフォールを狙った大技の波状攻撃をみせる。シーソー・ゲームの展開の中、越中が2度目のジャパニーズ・レッグロール・クラッチ・ホールドに入ったところを、高



田が膝十字固めで返す。捻られた状態だったので越中はたまらずにギブ・アップ。前田・高田が雪辱を果たした。